

# マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム —変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」に ついて考える (1)

畑 山 敏 夫

はじめに

## 1. フランス社会と政治の変容と FN

- (1) 「栄光の30年」の終わりと社会と政治の変容—安定した政治の終焉
- (2) フランスの経済社会の変容と新しい分断の時代へ—「二つのフランス」へ
- (3) 移民問題の争点化—FN の躍進を支えたもの

## 2. 政治家マリーヌ・ルペンを理解するために—ルペンの娘に生まれて

- (1) マリーヌ, 親に貰いし名は—「共和国の悪魔」の娘として
- (2) 弁護士から政治の道へ

はじめに

1988年5月、久しぶりにパリに赴いた。第二次世界大戦前に社会主義者からファシストに転じるという数奇な運命を辿った政治家マルセル・デア (Marcel Déat) についての資料収集が目的であった。その時に、片手間に国民戦線 (Front national, 以下 FN と略す) の情報や資料も集めてみた。1984年の欧州議会選挙で突然に躍進を遂げた極右政党のことは知っていたので、どのような政党か、何故にいきなり躍進を遂げたのか興味があったからである。

戦前のフランスにおけるファシズム運動やヴィシー政権について研究してきたものにとって、極右政党の躍進は青天の霹靂であった。戦後政治では周辺に追いやられてきた極右勢力が、それも、民主主義が成熟し、学生や民衆が政治への直接参加を経験した68年の「5月革命」を潜り抜けてきたフランスで、何故、いまさら極右政党の台頭か、というのが正直な実感であった。

現地で調べてみて分かったのは、日本のアルカイックな右翼団体とは違ったFN像であった。反共や北方領土返還、日教組撲滅、天皇制護持といった手垢にまみれ、当時でもかなりツボを外したプロパガンダを展開していた日本の右翼に比べて、FNは独自の視点からではあるがフランス社会の抱える問題に取り組み、オールラウンドな政策を提示し、各種選挙で積極的に候補を擁立するという点では「まともな政党」であった。そして、何よりもプロパガンダのツボを押さえていた。移民と治安、犯罪といった、当時のフランスが抱えていた課題を訴え、世論のなかで確実に支持を調達していた。

また、1980年代後半には、組織やイデオロギー、政策の整備に乗り出し、暴力的でコワモテの極右政党から脱却する努力を払っていた。もちろん、フランス社会では極右として、悪魔のように嫌われていたが、既成政党とは異質な政党として一部の有権者から票を集める存在になっていた。それが、筆者が初めて出会った1988年時点でのFNであった。

それから幾度もFN本部に足を運び、集会にも参加した。その間に、何度もFNは危機を経験し、消滅に向かうという診断がくだされた。しかし、その度にFNは危機を乗り越え、党勢の復活を見せた。パリに行くたびに党本部を訪れ、山あり谷ありのFNの歴史を観察しているうちに、早いもので30年が経過しようとしている。そのような長いFNとの付き合いをもとに、FNとはどのような政党であるのか、党首がマリーヌ・ルペン(Marine Le Pen)に代わることでFNの何が変わり、変わらないのか。どうして、2017年の大統領選挙で台風の目になるまでに党勢が伸びているのか、といった疑問に答えるのが本論の主目的である。そのために、本論文では、「マリーヌのFN」を多面的に分析、考察し、その躍進の社会経済・政治的背景を理解するとともに、「新しい」FNについて立体的・多面的に考察する。その作業は、次のような構成で進められる。

第1章では、周辺的存在であったFNが政党システムに参入・定着す経済社会的・政治的背景を簡単に確認しておきたい。

というのは、現在の党首マリーヌ・ルペンのFNは、イデオロギーや組織、政治戦略などの面で父親ジャン＝マリー・ルペン(Jean-Marie Le Pen)のFNを基本的に踏襲しており、マリーヌ・ルペンの「新しい」FNを理解す

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(1)  
るためにも、前党首時代のFNに触れておくことは不可欠であるからである。

第2章では、幼年期から政治家になるまでのマリーヌ・ルペンの半生記を扱う。右翼ポピュリズム政党にとってリーダーの存在は重要な要素である。マリーヌがFNの活動に至るまでの過程を追うことで、新党首マリーヌ・ルペンの性格や資質について考え、その発想や考え方の原点を確認するのは、党首マリーヌを理解する上で有益であろう。

第3章では、1972年に結党して、1980年代から1990年代にかけて政党システムに参入・定着する「ルペンのFN」を扱う(2)。そこでは、移民問題を梃子に台頭し、組織やイデオロギー、政策を整備していく時期のFNについて検証する。

というのは、「マリーヌのFN」はこの時期のFNを基本的に踏襲しており、いわば、現在のFNの原点と言えるからである(3)。ゆえに、本章の作業は原点を確認するための必要最小限の確認作業にとどめたい。

第4章では、マリーヌの下での党の刷新と「新しい」FNへの転換が進められ、新党首になってからは「普通の政党」、「政権担当可能な政党」として認知されるために本格的に「脱悪魔化」戦略が推進され、その結果、FNが目覚ましい躍進を見せていることを確認し、同時に、どのような支持者が「マリーヌのFN」の躍進を支えているのかを検証する。

第5章では、「マリーヌのFN」と「ルペンのFN」の連続性と新しさが検証される。「マリーヌのFN」が組織やイデオロギー、政策面では1980年後半から1990年代に築かれたFNとの強い連続性を持ち、その「新しさ」はFNのイメージ転換戦略の所産であることを確認する。

第6章では、「マリーヌのFN」の成功にとって、グローバリズムと欧州統合問題が重要な原動力になっていることを検証する。1980年代には移民問題がFNにとって重要な政治的資源であったが、新世紀に入って、移民問題とともに反グローバリズム・反EUの争点で、FNに勢いを与えていることを検証する。

第7章では、FNの躍進がフランスの政党システムにどのような影響を与えているかを検証すると同時に、フランス政治の変容とFN現象の意味を多角的に解説してみたい。それは、フランス政治の変容について考えることで

あり、FNの可能性と限界について考察することでもある。同時に、FNの躍進という現象を通じてフランスの政治とデモクラシーについても考えてみたい。「マリヌのFN」の成功を検証することは、同時に、それをもたらしたフランスの社会と政治を考えることでもあるからである。

他のヨーロッパ諸国と同様に、フランスは人口の高齢化、過剰な公的負債、国際競争力の低下、不況、失業の増加、社会的格差の拡大、社会の分断といった困難に苦しんでいる [Perrineau 2014 : 11]。政権は代われども国民の生活は改善されないなかで、少なからぬ有権者は政治を変えるオルタナティブとしてFNに期待している。1970年代には泡沫に過ぎなかったFNの党首が大統領選挙の台風の目になった現実が、フランスの危機の深さを表現していると言えよう。

## 1. フランス社会と政治の変容とFN

### (1) 「栄光の30年」の終わりと政治の変容—安定した政治の終焉

#### 第5共和制の復元力

戦後フランス政治は、決して常に安定していたわけではない。アルジェリア独立をめぐるクーデタの危機に直面した時代があった。1968年5月には、大学や職場の占拠や街頭での騒乱が全国に拡大し、ドゴール政権が異議申し立ての嵐に見舞われた時代もあった。

だが、アルジェリア独立戦争や68年の「5月革命」といった混乱と興奮の時期が過ぎ去ると、「第5共和制」は強力な復元力を発揮した。1958年に政権復帰したCh・ドゴール (Charles De Gaulle) は国内秩序を再建し、1962年にはアルジェリア独立戦争を解決に導いた。同年にドゴールは、大統領の直接選挙をめぐる国民投票を成功させ、直後の国民議会選挙で勝利することで、ドゴールの権力基盤と第5共和制の正統性は揺るぎないものとなった。

1968年の政治危機も第5共和制にとって深刻な事態であった。大学や職場が占拠され、パリに始まった運動の波は地方にまで急速に波及していった。街頭では激しいデモが繰り広げられ、学生たちは路上にバリケードを築き、投石と火炎瓶で治安部隊と激しく衝突した。経済社会活動は混乱し、非日常

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (1)

的空間のなかで言葉が解放され、政権は社会と政治へのコントロールを喪失した状態に陥った。革命を求める群衆を前に、第5共和制は危機にあると思われた (4)。

だが、体制は驚くほどの抵抗力と復元力を今回も発揮した。ドゴールは突如として総選挙に踏み切ることで社会運動の流れを遮断し、制度的チャンネルに世論を誘導した。結果は、ドゴールの勝利に終わった。シリネッリは『第5共和制』のなかで、68年5月を第5共和制にとって「負荷試験」であったと指摘しているが [シリネッリ 2014 : 41]、試験を守備よく乗り切った第5共和制は安定局面に向かう。

その安定期も長くはつづかなかった。1969年に実施された国民投票で敗北したドゴールは政界を去ることになった。1973年には、政治の安定の基盤であった経済成長の時代、「栄光の30年」が石油危機によって突如として終焉に向かうことになった。安定飛行をつづけてきたフランス政治は、不況と混乱の乱気流のなかに突入していった。

### 「栄光の30年」の終焉と左翼政権の蹉跌

戦後のフランス経済は、「栄光の30年」と呼ばれる長い安定と繁栄の時代を経験した。そのような長い経済成長は、政治と社会の安定を支える基盤であった。だが、1973年の石油危機をきっかけに、フランス経済は不況の局面へと突入した。不況下の物価高 (スタグフレーション) という想定外の苦境の中で、フランスは通貨価値の低落、貿易収支の赤字、財政悪化といった困難に直面した。保守中道のジスカール＝デスタン政権は、経済の根本的立て直しを図るが失敗する。

1981年に登場するミッテラン政権は、久しぶりの左翼政権ということもあり、国民の期待を受けて船出した。モーロワ内閣による「再配分的ケインズ主義」と呼ばれる政策は、雇用と生活水準、社会保障の改善へ乗り出した。だが、ミッテラン政権の改革は経済の再建と国民生活の改善を果たすことはできなかった。

左翼政権は国有化や国家による株式所得を通じた経済への介入に政策の軸を置いた。製造業や金融機関の分野での大胆な国有化による産業・金融政策

における国家の主導性の確保に乗り出した。だが、最低賃金や低所得者への住宅手当、医療給付・年金の増額といった購買力政策は、ドルに対するフラン価値の低下、貿易赤字と財政赤字の増大をもたらし、経済不況から脱することに失敗した。グローバル化する国際環境のなかで国際競争力をもたないフランスでは、一国的な経済対策が有効でないことが明らかになった [ラーキン 2004 : 417-431]。

フラン安と財政赤字の拡大のなか、ミッテラン政権は通貨変動幅を一定の範囲内にとどめる「欧州通貨同盟 (EMS)」からの離脱を断念し、「一国主義的」な改革路線を放棄した。結局、左翼政権は、国民生活の改善よりも緊縮政策や貿易収支の改善、企業競争力の強化、共通通貨の実現を優先するように追い込まれた。ミッテラン政権は改革の「休止」を宣言し、市場重視と緊縮財政の方向に舵を切った。つまり、改革路線を放棄して市場経済を受容したのである [シリネッリ 2014 : 68]。

ミッテラン政権は同時に、フランス経済の根本的な体質改善に向けて斜陽産業（鉄鋼、石炭、造船）の整理縮小と国際競争力の強化という産業再編に乗り出した [長部 1995 : 149-158]。自主管理の夢は捨て去られ、フランス経済の「近代化 (modernisation)」が優先課題となった。

「一国主義的」改革に挫折したミッテラン政権は、欧州統合に新たな期待を託した。それは左翼政権にとって大きな転換点であり、「一国社会主義」路線を放棄したことを意味していた。欧州統合はフランス的福祉国家の危機に対する処方箋であり、「国境を越えたりストラ」を意味していた [渡邊 2015 : 2-3]。

左翼政権はケインズ主義に立脚した経済再建路線を放棄し、市場経済の受容へと向かった。以降、左翼と保守の間で政権交代を繰り返しても、新自由主義に沿った政策が持続的に展開されることになる。「一国ケインズ主義」は破綻し、自主管理や労使関係改革などの「社会主義的」政策も挫折ないし換骨奪胎され、1986年の政権交代の時までには、左翼政党も、保守中道政党と区別化されるイデオロギーや政策体系を失っていた (5)。

左翼と保守は政権交代を繰り返すなかで政策的に接近し、長らくフランス政治を特徴づけてきた左右の対立軸は有効性を失っていった (6)。

## 繁栄の終わりと国民の分断-格差の時代へ

繁栄のプロセスが頓挫したとき、その皺寄せは民衆層に押し寄せた。1973年の石油危機がもたらした「スタグフレーション」が国民生活を直撃した。1981年には7.8%であった失業率は85年には10%を突破した。物価も1974年に比べて13.6%も上昇した。経済成長は終わりを迎え、フランス人の生活水準が上昇する時代は過去のものになった [シリネッリ 2014: 100-101, 畑山 1997: 22]。雇用情勢の慢性的悪化と生活水準の低下は、国民のなかに不満と不安を高めた。

1970年代から、フランスの経済や産業の構造は急速に変わっていった。何よりもフランス社会は大量の失業者を抱えるようになった。その原因は、産業構造の大きな変化であった。1970年代に入ると、フランスの製造業部門は急速に衰退していく。発展する非製造業部門での雇用の増加と製造業での生産過程の合理化によって、製造業部門では多くの雇用が失われた。その部門では、1976-2002年の間で150万人の労働者が減少し、失業者は40万人増加している。労働者のうち50万人は商業部門に、40万人はサービス部門に、45万人は運輸部門にと吸収されていった。ただ、それらの部門は低賃金で不安定な雇用が多く、労働組合に組織されて労働条件を改善する可能性も低かった。

ミッテラン政権の時代から、フランス経済の浮揚をかけた起死回生策として推進された欧州統合であるが、国民的富を拡大した半面、雇用を破壊し、最も脆弱な社会層をますます不安定化させ、社会の分断化に拍車をかけた。特に、パリやリヨンといった豊かな大都市部やその郊外と、製造業の衰退や空洞化、鉱山の閉鎖に苦しむ旧鉱工業都市、農業の衰退に見舞われている農村部とのコントラストが鮮明になっていった。

1990年代のフランスは、労働者やホワイトカラーといった民衆層にとっては苦難の時代であった。失業の増加と長期化、不安定雇用化、犯罪の増加(7)、社会的「排除」の広がりなど、彼らを取り巻く状況は厳しさを増していった。1990年代の半ばにはホームレスの急増が問題になっているが、失業問題も深刻であった。1985年に10%を突破した失業率は(10.2%)、87年にピークに達し(10.5%)、以降は低下していった。だが、1990年から再度上昇に転じ

94年には12.2%を記録している。特に、青年層では深刻で、フランス統計経済研究所の調査報告者では、84年には30歳未満の就業可能な若者で無職の割合は約20%に達し、20-25歳に限定すると失業率は28%を記録していた〔藤巻 1996：150-155〕。

左翼政権が新自由主義に屈服することで失業の増大と雇用の不安定化がもたらされ、不平等も急速に拡大していった。フランスは経済的には貧しくはなっていないが、国民の連帯性が弱まり、公平性が低下していった〔植村 2002：196〕。

1995年の大統領選挙で、保守系候補のJ・シラク (Jacques Chirac) がフランス社会の「断絶 (rupture)」を問題視するくらい、社会の分断は深刻な問題となっていた。シラク政権は当初は雇用最優先を唱えたが、通貨統合に向けて財政緊縮の優先へと転換して、公務員給与の凍結や各種の増税を掲げるようになり、1995年年末には激しい抗議運動が全国で展開された〔渡邊 20115：101-105〕。

1997年に成立したL・ジョスパン (Lionel Jospin) が率いる左翼政権でも、国際競争力の強化に向けてフランス・テレコムやクレディ・リヨネといった大型民営化が推進された。左翼と保守の間での政権交代が繰り返されたが、市場と競争力を重視した政策が展開され、失業や購買力、社会保障といった国民の生活改善につながる政策は重視されなかった。

失業と雇用の不安定化、社会的格差の拡大の時代に、FNが急速に民衆層に支持を広げ、FN支持層の「プロレタリア化」という現象が語られるようになるのは偶然のことではなかった。

### 政治への信頼の低下—政治的代表制の危機

先進者社会で共通の現象であるが、フランスでも政治への不信と不満が高まっていた。その象徴的表現が1980年代に始まる選挙での棄権の増加であり、過去20年でさらに拍車がかかっている(8)。フランスは徐々に「政治不信の社会」になっていった(10)。

政党への興味の喪失、労働運動の弱体化、公共空間への参加の衰退、棄権の増加といった政治危機の兆候が見られるが、急進的な政党への支持の高ま



マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (1)

りも政治危機の表現である [Albertini 1997 : 18]。

労働者やホワイトカラーを直撃する苦境に対して歴代の政権は問題解決能力の欠如を露呈し、政治腐敗の事件も頻発した。民衆層を中心に政治不信は高まり、有権者の投票行動に大きな変化が表れ、既成政党と民主主義に対する不満と不信が増大していった。

そのような傾向は、左翼政権への失望とも絡んで、1980年代半ばから顕著になる。1984年に実施された世論調査では、「政治家は真実を語っていない」という回答は10%にすぎず、否定的回答は82%に達していた。ところが、「政治はあまり、もしくは全く尊敬すべき活動ではない」という回答は、1985年の26%から、1991年には44%に急増している。「政治家は腐敗している」という回答も、1987年の42%から1991年の58%へと増加している [畑山 1997 : 28-29]。熱い期待を寄せた左翼政権による改革の挫折が、政治家と政治への不信の時代を切り開いたのであった。

経済社会の行き詰まりは、人々の間に不安と不満を掻き立てる。国民の苦境に有効に対処できない政党や政治家、議会制民主主義への信頼性は低下していった。政治家が普通の人々の生活に関心を持っていないという感覚、政治エリートによって無視されているという感覚は、有権者に強いフラストレーションをもたらした。

有権者における現行政治への不満や不信は、世論調査以外にも様々なシグナルから読み取ることができる。EU 統合の推進を問うマーストリヒト条約に対する国民投票 (1992年) での反対票の多さ、各種選挙での棄権の増加、FN への民衆票の増加 (FN 支持層の「プロレタリア化」) といった現象は、政治への信頼の危機を表現していた。

その結果、フランス政治の安定した時代を特徴づけてきた左翼-保守の二極対立構造 (「カドリーユ・ポピュレール」) は揺らぎ、その間隙を縫って FN のような右翼ポピュリズム政党の台頭が始まる。1990年代までは、ドゴール主義政党・中道政党と社会党・共産党という二極対立構造がフランス政治を支配してきた。1981年の左翼政権の成立以降、第5共和制では政権交代可能な民主主義が機能し、左翼と保守陣営が大統領と首相を分ちあう政権 (「コアビタシオン」) の時期でも、基本的に政治システムに大きな混乱はなかつ

た。

だが、1980年代に始まった政治的代表制の危機は1990年代に増幅し、カドリーユ・ポピュレールも揺らいでいった。その20年の間に、有権者の四分の三が政権担当可能な既成政党に投票した時代から、棄権票と左右の急進主義的政党に投票する有権者が過半数に達する時代に突入した。そのような既成政党への拒絶の受け皿として、多くの国では左右のポピュリズム政党が登場している。ただし、フランスの場合、ギリシアのシリザやスペインのポデモスのような有力な左翼ポピュリズム政党は出現せず、政治への異議申し立ては専ら FN という右翼ポピュリズム政党に独占されている（9）。

小熊英二は「自分がないがしろにされている」という感覚、そのような漠然とした不満や不安が目に見える具体的な形として表れてきたときに、人々は感動・行動すること、人々が何を「自分をないがしろにしているもの」の象徴と見做すかは各社会で異なっていることを指摘している [小熊 2012 : 438-441]。

FN の言説も、そのような感覚の広がりによって理解できる。「ないがしろにされている」という感覚が移民問題と接合され、国民が「ないがしろにされている」という感覚が醸成される。そこから、フランス国民を「ないがしろにしている」責任者が特定される。それは、国民の主権を踏みにじる EU であり、大量の移民を導入して国民を苦しめているエリートたち、特に、既成政党・政治家たちである（10）。

グローバル化や EU 統合、大量の移民によって引き起こされる不安と結合したナショナリズムが極右に新たな武器を提供し、脱産業化や産業空洞化、福祉国家の危機、人口の高齢化、移民の増大によって脅かされている生活の質（安全、汚染されていない環境、文化的資源へのアクセス）に関わる不安が極右に新しい息吹をもたらしている [Taguieff 2006 : 24]。

不安定な職業生活の中で階級的意識は薄らぎ、政党に対する忠誠心は揺らいでいった。地域社会を襲う慢性的な危機への不安感とフラストレーションを抱える有権者に、FN の言説は容易に浸透していった。

## (2) 経済社会の変容と新しい分断の時代へー「二つのフランス」へ 新しい政治的亀裂の出現

1980年代以降、左右両翼へとフランス政治が二極化していった時期に、政治的対立は大きく変化を見せた。左右の既成政党のイデオロギー的・政策的立場が接近し、古い政治的対立軸の影響は低下した。例えば、政教分離に関わる対立軸である私立学校補助金問題は対立の実体を喪失していた。また、主要な対立軸であった社会経済政策も、1983年以降はミッテラン政権が緊縮財政と経済の自由化に舵を切り、市場競争を重視した産業の「近代化」と国際競争力の強化に転じてから、社会経済政策は対立軸の実体を失ってしまった。政治的対立は、移民やグローバル化、欧州統合、環境といった新しい対立軸へと移っていった [中山 1999 : 265-275]。

伝統的対立軸の無効化、新しい対立軸をめぐる既成政党間でのコンセンサス状態といった政党間競合の現実には、FNが政治的利益を得る機会を提供した。政治研究者のパスカル・ペリノー (Pascal Perrineau) は、FNの躍進にとって決定的役割を果たしている5つの断層を指摘している [Perrineau 2014 : 106-107]。

第1は、経済的断層である。グローバル化に激しく襲われている危機にあるヨーロッパで、経済的グローバリズムの犠牲者だと考える人々と、経済システムを変えるためにグローバル化を推進しようとする人々との断層が表面化している。

いわゆる、グローバル化の「勝ち組」と「負け組」が明確になり、グローバル化から恩恵を蒙る (か期待できる) 個人や産業、地域と、そうでない個人や産業、地域の差が顕在化していった。青年層と高齢層、重化学工業や炭鉱などの斜陽産業と金融や情報、ITなどの成長産業、北東部や東部の産業衰退地域とパリやリヨン、マルセイユなどの大都市とのコントラストが鮮明になっていった (11)。

グローバル化の争点は、産業空洞化や安価な労働力としての移民・難民の流入、国民的アイデンティティなどの問題としてEU統合とユーロをめぐる対立へと接合されている。

第2には、市民社会の「開放」に関わる断層である。フランス社会を国際

的に開放する動きを進めようとしている人びとと、国民国家と保護主義の方向に戻ろうとする人々との断層である。

この政治的亀裂は、国家の役割の再評価と国家主権の回復のテーマに接合している。FNの主張が典型であるが、強力な国家を回復することで、フランスを閉じた国民共同体として再生することが説かれ、そのような立場をとる「愛国主義勢力」と、国民共同体を外部に開放し、国民の利益とアイデンティティを破壊する「コスモポリタン勢力」が対置されている。

第3に、1960年代末からフランスが経験した規範と価値の自由化のプロセスに関する断層である。文化的リベラリズムがより社会に浸透すべきと考える人々と、自由化のプロセスにブレーキをかけ、より伝統的・権威主義的な規範と価値に回帰する時であるとする人々との断層である。

第4に、第1の分断と重なるが、地理的分布とその変化に基づく断層である。人口の移動と経済活動の再編は、フランスの地理的断片化に作用した。多かれ少なかれ生活レベルの低下に直面している周辺のフランスと脱産業化や欧州統合から恩恵を受けている大都市部のフランスとの対立をもたらしている。二つのフランスへの分断は構造的なものとして定着し、有権者の投票行動を規定する要因の一つになっている。

第5の断層は政治領域に属し、政治不信の強い感情に立脚している。「統治文化」に一体化している既成政党と、「反システムの文化」を発展させ、現行の政治を拒絶する「異議申し立ての文化」に立脚する政党の対立を軸に編成されている。

そのような断絶は近年では増々鮮明になり、有権者に広がる政治不信は既成政党に強い逆風をもたらしている。2017年の大統領選挙では、社会党と共和党という左右両翼の既成政党の候補が第1回投票で敗退し、E・マクロンとマリーヌ・ルペンという非既成政党の候補が決戦投票に進出している。

以上のような複数の断層が重層的に作用し、フランス政治に構造的な変容をもたらし、右翼ポピュリズム政党に有利な条件をつくりだしている。

### 左翼—保守の対立軸の揺らぎ

1990年代以降、ペリーの指摘する第5の断層が、新興政党に有利な環境を

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (1)

もたらした。既成政党の影響力が低下し、FN や緑の党のような新興政党が台頭している。

1990年代には、フランス政治を特徴づけてきた左右両翼の二極対立構造は崩れ始めた。FN と緑の党という新興政党の台頭、フランス共産党の衰退という新たな事態によって、政党システムは再編成に向った。特に、FN の選挙での伸張は二極対立構造を崩して、政党対立を三極化する事例が見られるようになった。そして、2000年代には、左右の既成政党への不信と不満は更に高まり、FN は現実政治への異議申し立ての手段として、また、現実には試されていないオルタナティブとして支持を拡大していった。

特に、ポピュリスト政党として FN が民衆層からの支持を増やしていくが、それは左翼政党が民衆層で支持を減らしていることとパラレルな現象であった。フランス共産党は、1981年にミッテラン政権に参加することで既成政党と同一視されるようになり、1980年代末の社会主義体制の崩壊によってイデオロギー的威信も失った。自主管理社会主義を掲げていた社会党も政権政党として現実主義化し、民衆層の変革への期待に答えられなくなった。

購買力の低下や賃金の減少などに対して、社会党や共産党は有効に対処する政党としての信頼を失っていった。それに対して、FN の言説はますます社会的テーマを軸に展開されるようになり、国民的土台に立脚した連帯を提唱している。フランス国民の利益とアイデンティティの防衛を訴える FN の言説は、不安に苛まれた社会的カテゴリーに無視できない影響を發揮するようになった [Crépon 2012 : 151-152]。

2002年の大統領選挙では既成政党の衰退、新興政党の台頭という現象が顕著になった。左右両翼の急進的政党に投票した有権者は29% (18-24歳の青年層では31%, 25-34歳では34%) に達している (Muxel 2012 : 26)。

## フランス社会の変容と新しい対立軸の顕在化

FN の台頭は、文化的亀裂の重要性を抜きに理解できない。1990年代には労働者や事務職といった民衆の階層で FN は支持を伸ばした。民衆層への浸透には、購買力の低下や失業問題、非正規雇用化といった社会経済的要因が大きく作用していたことは確かである。だが、それだけでは FN 支持のメカ

ニズムは説明できない。知的職業や自由業といった高学歴の職業カテゴリーで苦戦していること、一貫して移民問題が重要な支持動機であることも考え合わせると、文化的要素もFNへの支持を規定していると考えられる。

1960年代後半から、フランス社会は大きく変わっていった。事実婚の増加、妊娠中絶の合法化、離婚の増加、男女関係の平等化、女性の職場進出、個人主義化の進展と、習俗や生活様式の自由化が本格的に進んだ。文化的リベラリズムの価値観や感覚が急速に広がっていった。他方で、学校教育、メリットクラシー、社会的上昇移動が社会的分断化 (*ségrégation sociale*) に抗しきれなくなり、青年層の絶望やフラストレーション、エリートへの嫌悪感を醸成した。福祉国家と社会的再分配のシステムは新自由主義の攻撃を受け、福祉依存者をめぐる言説は友愛と連帯への愛着を打ち砕いた [Ouraoui 2014 : 21]。

先進国では不況や失業、不安定雇用の増大、家計の購買力の低下など経済をめぐる争点群に立脚する経済的対立軸が後退したわけではないが、移民問題や犯罪、テロ、国民的アイデンティティ、環境、人権など社会的・文化的対立軸も重要性を増していった。そのような新しい争点群にそって、新しい政党が台頭する。

それが右翼ポピュリスト政党とエコロジー政党である緑の党であった。両党は対極的な政治的主張を掲げているが、それは基本的に支持層の相違を反映していた (12)。

2007年の大統領選挙でルベンは大幅に得票を減らす、18-30歳でディプロームを持たない層では22%がルベンに投票している。他方、学生層では3%しかFNに投票しておらず、青年層が学歴を軸に二分化されていることは明らかである [Muxel 2012 : 31-32]。

有権者では、文化的価値感にそって二分化され、図式的に言えば、高学歴で文化的リベラリズムの価値観や感性を身に着けた有権者は緑の党に向かい、低学歴で権威主義的価値観や感性を身に着けた有権者はFNを支持する傾向がある (13)。

後者の場合、有権者がFNに投票するのは既成政党への不満の表明や現行の政治に対する異議申し立ての行動であると同時に、FNの権威主義的で排

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (1)

外主義的な主張への賛同による行動と解釈できる。

そのことは世論調査の結果によっても確認できる。有権者全体でも決して移民への過剰感は少なくないが、圧倒的多くの FN 投票者は強い過剰感を表明している。また、「自分の国にいる気がしない」という国民共同体の純化を求めるような感情は、有権者全体でも増える傾向にあるが、FN への投票者では高い割合を示している。FN 支持層ではエスノセントリック (自国民中心的な) 発想が極めて強く、ナショナル・アイデンティティの危機に敏感で、そこから、FN の「自国民優先」の言説に共鳴していると考えられる (表 1-1 参照)。

男女の平等や性的マイノリティの権利、習俗やライフスタイルの自由化、異なった民族や文化への寛容といった文化リベラリズムの価値に共鳴する有権者が増加するなかで、そのような傾向に反発、反対し、国民的な文化やアイデンティティ、秩序と規律に執着し、伝統的な家族・女性観を支持し、異質な他者との共存を嫌う有権者が確実に存在している。

表 1-1 有権者におけるエスノセントリックな意識の変化 (1988-2011年)(%)

	有権者全体	ルペン投票者	差
「フランスには移民が多すぎる」			
1988	65	95	+30
1995	74	97	+23
2002	65	97	+32
2007	56	90	+34
2011	51	91 (96)	+40
「以前ほど自分の国にいる気がしない」			
1988	49	78	+29
1995	57	87	+30
2002	55	84	+29
2007	48	80	+32
2011	43	82 (91)	+39

1988年と1995年の結果は Cevipof が大統領選挙後に実施した調査、2002年・2007年の結果はフランス選挙パネルの第1回調査、2011年に関しては FN 投票者ではなく、FN の考え方に賛意を表明した回答者での割合 (サンプル数213) (括弧内はマリーヌへの投票意向を明らかにした回答者-サンプル数55-での割合)

出典: [Mayer 2012: 148]

FNは死刑の復活や多文化主義の批判，伝統的家族観・女性観の擁護といった主張で，文化リベラリズムに反発や不安をもつ有権者に浸透していった。

### (3) 移民問題の政治的争点化—FNの躍進を支えたもの

#### 移民を取り巻く環境の変化

第1次世界大戦で140万が戦死したフランスでは，労働力不足を補うために移民の受け入れを始めた。第二次世界大戦後は，戦後復興から経済成長の過程で労働力不足を補うために毎年10万人単位で移民を受け入れ，1974年には移民は人口の6.5%を占めるに至った。

戦間期は比較的経済発展が遅れた南欧からの労働者であり，文化的にも近いこともあってやがてはフランス社会に統合されていった。だが，第二次大戦後の経済成長の時代に製造業や都市雑業などを担う労働力が不足すると，アルジェリア，モロッコ，サハラ以南アフリカ諸国などの旧植民地ないし海外県から労働力を移入することになった〔竹沢 2011：96-97〕。非ヨーロッパ系の移民の急増は，生活習慣や宗教，文化の摩擦を生み出し，国民の間で移民に対する偏見や差別を高める要因となった。

移民を取り巻く環境は，1973年の石油危機をきっかけに大きく変化する。移民は期限付きで滞在しているというイメージもあり，経済成長がつづき完全雇用状態が保たれている限り国民に受容され，フランス人の望まない職業に就き，フランス経済に貢献する存在と見られていた。

石油危機による景気の後退と失業の増加を受けて，政府は1974年に移民の新規受け入れの停止を決定した。その結果，移民は定住化に向かい，以降も，家族呼び寄せ，難民，不法入国・滞在によって，フランスの移民は増加していった。経済不況と失業の増加という状況のなかで，移民労働者の存在は地域社会で可視化し，さまざまな摩擦を引き起こした。経済成長に貢献してきた移民の存在は，一転して社会問題化し，国民のなかに移民に対する厳しい視線が広がっていった〔畑山 1997：37〕。

移民問題の象徴的な場所が，都市郊外の低家賃社会住宅（HLM）であった。1970年代からHLMでは「エスニック化」と貧困化が進み，治安が悪く



マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (1)

失業者があふれ、移民が集住する場になってしまった。1980年代には犯罪発生件数が増加していくが、犯罪と移民の存在が結び付けられてマスコミを通じて流布され、犯罪者=移民という図式が国民のなかに浸透していった [畑山 1997 : 37]。2005年の都市暴動は、そのような郊外自治体の一つで始まった。パリの北東にあるセヌ=サントニ県のクリシー=シュル=ボワで勃発した移民青年たちの暴動は、わずか3週間のあいだにフランス全土の都市郊外に拡大した。3万台近くの車が燃やされ、百数十台の公共バスと数十ヶ所の公共施設も放火された。その事件は、フランス国籍を有する移民の子弟たちが、日常的な差別に直面し、統合不可能な「他者」としてフランス社会のなかで排除されていることを物語っていた [竹沢 2011 : 98]。

### 移民への冷たい視線

移民に対するフランス人の眼差しは変化していった。1971年には世論調査で「移民は国に役立っている」という回答が68%に達していたが、次第に移民が多すぎるという過剰感が各種の世論調査で見られるようになった。移民に対する負担感、不安感が国民の間に強くなり、犯罪の増加や福祉財源の逼迫、失業の増加、地域の環境や学校の荒廃、エイズやドラッグの蔓延といった事態が、移民の存在と結び付けられるようになった。

その結果、国民の移民に対する視線は冷たくなっていった。途上国出身者への植民地時代からの差別的で外国人嫌いの感覚は、移民への排外主義的言動を強化した。1980年代には、移民の身体と財産への加害行為は急速に増加していく [畑山 1997 : 41-43]。

「全国人権諮問委員会」が1990年3月28日に公表した報告書によれば、移民を取り巻く環境の変化と移民の可視化は、国民の移民に対する感情に変化をもたらした。フランス社会に溶け込もうせず、習俗や宗教的・文化的独自性を維持しようとする点も問題視された。その象徴的事例が、1989年にパリの北に位置するオワーズ県のクレイユ市の中学校で起こった「スカーフ事件」である。公共の場である学校に、イスラムの象徴的服装であるスカーフを着用して登校することの是非が論争となった。フランスのライシテ（世俗主義政教分離）と絡めて展開された議論は、国民のイスラムに対する違和感

を示していた。その事件は左右両翼、政党を横断して政教分離をめぐる論争を巻き起こし、1993年には当時の教育相F・バイルによって「控えめな宗教的表象」は認めつつ「宗教を誇示し、宗教的所属をこれ見よがしに示すような表象、服装」の着用を一切禁止する「スカーフ禁止法」が制定されている〔井出 2009：22-23〕。

その他にも、学校教育でのハラール処理した食材での給食の要求、女性徒の水泳授業への出席拒否、イスラム女性の医療機関での男性医師による診察の拒否、一部に残る一夫多妻の習慣、女性への差別的（に見える）待遇も、フランス社会に統合を拒否するイスラム系移民というイメージを強め、国民の排外主義的・差別的感覚の温床となった。

そのことはフランス独自の国家モデルにも由来している。1998年にコンセイユ・デダ（国務院）が「平等の原則について」という報告書を出しているが、そこでは、孤立した、普遍的な、他者と類似した個人だけが「フランスによって承認される人民の構成要素」であると述べられている。私的空間での自由と公的空間では徹底して何らかの「色」を持たないという共和主義的統合の原理、ライシテが語られている〔井出 2009：24-25〕。

そのような国家モデルは政教分離だけでなく、普遍的で孤立した個人として社会に統合されることを外国人に求める。そのような統合に応じないで、同じ民族の移民が集まって生活し、独自の習俗や文化を保持することは「コミュニタリズム＝共同体主義（communautarisme）と非難される（14）。国民共同体に異質で統合不可能な存在は、排外主義と外国人嫌いの格好のターゲットになった。

それまで安定もしくは減少を見せていた人種差別と外国人嫌いの偏見は、2010年代に入って再び勢いを増している。そして、偏見の最大のターゲットはイスラム系住民に向かっている。例えば、ムスリムがフランス社会で「独特な集団を形成している」と考える割合は、2009年の44%から、2010年には48%へと増加している〔Crépon 2012：291〕。

## 移民問題の政治問題化

移民をめぐる社会の分断状態は、同じ民族や宗教に属する移民でコミュニ

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (1)  
ティを形成してフランスに社会に同化しようとしないうという反発や、フランス人が移民よりも不当に扱われているという不満や反発を高めた [Crépon 2012 : 194-195]。

その点を捉えて FN は、統合を拒否して国民を分断する「コミュニタリズム」として非難すると同時に、フランスの地でフランス人が不当に扱われ、社会給付やサービスの提供において移民に比べて不当に差別されていると喧伝し、それはフランス人に対する差別（「反フランス人的人種差別 (racisme anti-français)」）であると告発している。国民のなかに潜在する反移民感情や外国人嫌いの感覚を利用した FN の巧妙なプロパガンダは、少なからぬ有権者に受容されている [Crépon 2012 : 194-195] (第3章で詳説)。

FN の言説が浸透していった背景には、移民問題の政治化に対して、既成政党が的確な対応を打ち出せなかったことも作用していた。既成政党の消極的姿勢に対して、FN は移民問題に正面から取り組む政党であること、唯一タブーを破り、真実を語る勇気ある政党であることをアピールした (15)。

1980年代の前半に、移民問題をめぐる FN のプロパガンダは有権者の支持を調達し始めた。といっても、FN はこの時に移民問題を急遽として争点化したわけではなかった。民族共同体の利益とアイデンティティを重視する極右政党として、結党の時期から移民問題と外国人の同化、国境について訴えていた。ただ、有権者からの反応がなかっただけである [Igounet 2014 : 43]。

1990年代に入ると、移民をめぐる既成政党の言説は FN のそれに接近し始める。1990年に国民議会で社会党の有力政治家 M・ロカール (Michel Rocard) は「ヨーロッパは世界の悲惨な人々をこれ以上受け入れることはできない」と発言して、移民のコントロールの強化を説いている。また、保守政治家たちも、「侵入 (invasion)」(ジスカール・デスタン)、「寛容の限界 (suil de tolérance)」(J・シラク) といった FN と同じ表現を口にしていく [Collovald 2004 : 154]。

移民問題が政治化することで、FN は願ってもない宣伝材料を手に入れた。結党時から展開していた反移民的言説であったが、有権者の移民に対する眼差しの変化を受けて、それはポピュリス的扇動の有力な手段となった。移民の排除と自国民優先の言説は FN 躍進の原動力となり、ポピュリズム政党と

しての成功の鍵となった。

次章以下では、本格的に「マリーヌのFN」についての分析と考察に取り組むが、第2章では、マリーヌ・ルペンの個人史に焦点を当てる。有名な極右活動家ジャン＝マリー・ルペンの三女として生まれ、弁護士から党の活動家になるまでの苦悩に満ちた時期を扱う。ただし、本論の中心的な目的である、「マリーヌのFN」を理解するうえで必要な限りでマリーヌの個人史に触れることは断っておきたい。

右翼ポピュリズム政党において指導者の果たす役割は大きいが、父親とは異なったマリーヌの発想や感性、考え方は「新しい」FNに向かう重要な要素であった。マリーヌの幼少から青年時代を追うことは、「新しいFN」のリーダーを理解するためには有益であろう。

## 2. 政治家マリーヌ・ルペンを理解するために —ルペンの娘と生まれて

### (1) マリーヌ、親に貰いし名は—「共和国の悪魔」の娘として マリーヌの青春と苦悩

1968年8月5日、チェコスロヴァキアのプラハにソ連軍の戦車が侵入し、人々の自由への希望を踏みにじった日から2週間後、マリーヌはルペンとピエレット・ララーヌ (Pierrette Lalanne) の三女として誕生した。両親の愛情をたっぷり注がれて、マリーヌは「お転婆で向う見ずな娘」として育った [Fourest et Venner 2011 : 30, Liskai 2011 : 49]。ただ、両親の愛情に恵まれて育ったとはいえ、幼少時代から思春期にかけて、マリーヌの人生は決して平坦で穏やかな日々ではなかった。

その最大の原因は、父親が有名な極右活動家で、「フランスで最も嫌われている男」であったからであった [Machuret 2012 : 10] (16)。街頭での乱闘で右目を失い、黒い眼帯をつけていたこともあって、ルペンはコワモテの極右活動家のイメージを醸し出していた。蛇蝎のように嫌われていた極右の活動家で、異様な風体でコワモテの政治家ルペン、そのような極右の筋金入りの活動家を父親としてマリーヌはこの世に生を受けた。そのことは、マリー

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (1)

ヌの人生に暗い影を落とすことになる。

極右自体が、フランスでは極めてネガティブなイメージで見られていた。対独協力の暗い過去を引き摺り、戦後は過激で暴力的な運動というイメージが流通していた。

ルペンは、世間から蛇蝎のように嫌われることを楽しんでいるかのように、「共和国の悪魔」と呼ばれることを好み [Sineau 2012 : 130]、一種のヒーロー役を売り物にしている感もあった。

そのような破天荒な父親の存在は、マリーヌの人生に多大な影響を与えた。幼少時代に暴力的な襲撃に巻き込まれ恐怖の時間を過ごしたこと、政治活動に熱中して家庭を顧みない父親の生き方が夫婦の不和と離別を引き起こしたこと、ルペン姓によって学校生活で不愉快な体験に直面したこと、自由な職業選択が阻害されたこと、念願の弁護士になっても職業活動が大きく制約されたこと、ルペンの娘であることで、マリーヌは多くの苦しみと悲しみを味わった。

普通ならば穏やかで楽しい日々であるはずの少女時代であるが、マリーヌは好奇と敵意の目で見られる生活を送った。そして、父親に向けられた敵意は、ルペン一家に暴力と恐怖の体験を強いることになった。幼いマリーヌは、深夜に自宅が爆破されるという恐怖の事件に巻き込まれる。

冬の到来を前にした1976年11月2日の深夜、ルペン家が入居する住居が爆破される事件が発生した。その事件がマリーヌにとっていかにショックであったかは、彼女の自伝『流れに抗して (À contre flots)』がその事件の記述で始まっていることが示している。

パリ15区のポワリエ通りにあるルペン一家が入居していたアパートマンは、5階がルペン夫妻の住居兼事務所、6階が3人の娘たちの住居であった。夜の闇のなか、瘦せぎすで白髪、年齢の頃なら50歳前で長身の男が慌ててその建物を離れた。深夜3時45分のことである。その時に、もう一つの人影が5階の玄関当たりから立ち去り、二人は合流した。背の高い男は、茶色の髪で痩せこけた小柄の男に4階のエレベーターに時限装置付きの爆弾を仕掛けたことを告げ、二人は足早にその場を立ち去った。そして、彼らが現場から離れたとき、大きな爆発音が響き渡った [Liszkai 2011 : 29-30]。

20キロのダイナマイトが爆発し、マリーヌたち三姉妹はパジャマとスリッパのまま11月初頭の寒空のもとに放り出された。愛犬のプードルが死んだ以外は、幸いなことにルペン一家の生命に別状はなかった。だが、その事件は幼いマリーヌに大きな影響を残した。彼女は政治の暴力的で残酷な側面に触れ、父親が政治に携わっていること、有名人であり命を狙われている人物であることを思い知ることになった。その事件はマリーヌにとってトラウマとなり、長年に渡って父親の身に何かが起きるという不安に苛まれ続けた [Fourest et Venner 2011 : 30-32]。

その体験は恐怖心を植えつけ、テロリズムへの嫌悪感を与えたと、マリーヌは後に自伝のなかで述べている [Marine Le Pen 2006 : 9-22]。また、この事件は父親に対する社会の視線をマリーヌに自覚させることになった。テロリストの卑劣な襲撃に対して連帯と同情が寄せられることはなく、ルペンが他の政治家とは違った扱いを受けていて、これから父親に何か起きた時も同様の仕打ちを受けるであろうことを理解した。父親に対するそのような世間の差別的対応に、マリーヌは強い憤りと反感を覚えた [Liszskai 2011 : 32]。

この事件により、父親に対するマリーヌの愛情は深まった。後に党首として父親と訣別することになるが、それまでは一卵性親子のようにマリーヌはルペンと行動をともにし、失言を重ねる父親を支え続けるのであった。

## 学校生活の憂鬱

マリーヌにとって、学校は決して心地よい場所ではなかった。ルペンは私学に娘たちを進ませることなく、マリーヌが8歳になると党本部兼住居のあるサン＝クルーの公立小学校に入学させた。学校生活を通じて、マリーヌは父親が注目される存在であることを実感し、その娘であることは常に監視される不公正な世界に生きることであり、自分と父親を守ることを強いられることを自覚した。

ルペンの娘であることで学校では差別的に扱われ、敵意に満ちた環境のもとでマリーヌは日々の生活を送った。学校生活は、マリーヌにとって非情な空間であった [Marine Le Pen 2006 : 15, 47]。

中学校では、12歳か13歳のマリーヌに対して何人かの教師は、ルペンの娘

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (1)

であるというだけで忌み嫌った。口先では教育の中立性を唱えながら、彼らは父親のことを嘲笑し、ルペンに対する敵意を隠さなかった。例えば、1か月間もコルセットを装着するような大怪我をしたマリーヌに、ある教師は同情するどころか「芝居は止めろ」と冷たく言い放った。別の時には、聖母マリアのペンダントをしていたところ、それをセーターの下に隠すように教師に求められた。彼は冷徹に「マリーヌ、みんなが貴方と同じ宗教的意見を持っているわけではない」と衆人の中で言った。そのような仕打ちを受けたマリーヌは精神的に傷つき、転校を余儀なくされた [Fourest et venner 2011 : 41, Marine Le Pen 2006 : 48-49]。

1980年代に入ると、選挙で躍進を始めた FN にメディアの注目は高まり、それはルペンへの敵意と警戒心を高めることになった。マリーヌを取り巻く環境は厳しさを増していった。

と言っても、敵意に満ちた環境のなかでも、マリーヌは委縮して暮らしていたわけではなかった。高校時代、マリーヌは勉強熱心で、騒がしく反抗的で生意気な生徒であった。母親が出奔した時には途方に暮れて泣いて暮らした時期もあったが、普段は陽気に暮らしていた [Simon 2011 : 239]。ルペンと自分へのバッシングに、マリーヌは決して負けてはいなかった。

そのような逆境はポジティブな効果ももたらした。1つは、ルペンと三姉妹の絆を強めたことである。「学校生活での拒絶は刑務所の囚人のように私たちを連帯させた」と次女のヤン (Yann) は証言している [Liszakai 2011 : 55]。

2つ目は、マリーヌを政治に向わせたことである。父親が極右の政治家であることがマリーヌを逆境に追いやったが、とって、マリーヌはそれで政治嫌いになったわけではなかった。逆に、彼女を政治へと向かわせることになった。父親が人種差別主義者であるのか、アルジェリアで本当に拷問をしたのかと同級生に問い質されるとき、マリーヌは父親を擁護して彼らに反論することで、気づかないうちに政治に関わり始めていたと、マリーヌは後に語っている [Rosso 2011 : 182]。

新世紀に入って、マリーヌは FN から「反民主主義」「極右」といったマイナス・イメージを払拭しようと努力するが、その背景には、学校時代にル

ペン＝ファシストという偏見をもつ人々にいじめられた経験があるといわれている [Simon 2011 : 19]。その意味で、マリーヌの学校での体験は、政治家マリーヌの行動に大きな影響を与えたと言える。

### 母の出奔とマリーヌの苦悩

1984年10月10日12時ころに、姉のヤンがマリーヌを探しに高校にやってきた。ヤンは妹に母親の出奔を知らせた。「ママは出て行ったわよ」「ママが出ていった？つまり・・・」「ママは出ていったのよ」「でも、どこに？」「知らないわよ」「出て行ったって、1週間、半月？」「ママは家出したのよ。身の回りの物を全部持って。分かる？家出したのよ」。

その出来事は、16歳のマリーヌには理解を超えたことだった。政治に熱中し、家庭にいない父親に代わって、ピエレットは家政婦ナナの助けをかりて家庭生活を支え、3人の子供を育てていた。そんな妻が、ルペンのアドバイザーであり、彼の伝記を執筆中であった作家J・マルシリ (Jean Marcilly)のもとに走り、二人は同棲することになった。昨日までの慣れ親しんだ、幸せなマリーヌの家庭生活は突然に音を立てて崩れていった。母の帰りを虚しく待ちつづけたが、母はマリーヌのもとには戻っては来なかった。マリーヌは酷く傷つき、精神的に追い込まれていった。家庭でも学校でも、涙にくれるばかりで、授業も受けられない状態に追い込まれた。保健室で時間を過ごすマリーヌの学業成績は、急速に悪化していった [Marine Le Pen 2006 : 101 -107]。

母親の出奔をめぐる辛い日々は、両親の離婚をめぐっても続いた。離婚訴訟が始まると、マスコミは極右政党の党首のスキャンダルを逃すことなく、その話題に飛びついた。ピエレットはメディアで、ルペンへの敵意剥きだしの発言を繰り返し、ルペン家の秘密を次々と暴露していった。裕福な支持者からの不明朗な相続によるサン＝クルーの党本部の取得やスイスの銀行に預けられた隠し資産の存在といったルペンの金と財産をめぐるスキャンダル、第2次世界大戦やナチズムについての姿勢を裏付けるルペンの読書傾向など、数々の個人情報暴露した。

当時は、遺産相続を狙った「暗殺者」という告発に加えてアルジェリアで



マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (1)  
従軍していた時代に「拷問執行人」であったという罪科もルペンに持ち上がっていた。マリーヌは高校への通学中に書店の店頭には貼られた雑誌の宣伝ポスターに、「ルペン、拷問執行人」「ルペンの手は血まみれ」「ルペンは拷問を加えた」といった文字が躍っているのを目にした。そのような体験は、16歳のマリーヌを精神的に傷つけ、とうとう心痛のために体調を崩すまでに追い詰められた [Marine Le Pen 2006 : 115-116]。

母親の自由奔放な言動はルペン親子を傷つけ、思春期のマリーヌを精神的に追い込んでいった。

### 『プレイボーイ』誌で母はヌードに

そして、極めつけは、母親による考えもしなかったルペンへの意趣返しであった。ピエレットは『プレイボーイ』誌 (1987年7月号) でヌード姿を披露した。当時は18歳で法学部の学生であったマリーヌが帰宅すると、姉たちから母親のヌードが雑誌に載っていることを告げられた。そのショックから、マリーヌは2週間大学を休むことになった。これまで離婚絡みで母親から数々の手酷い仕打ちを受けたが、今回の行為は最もマリーヌに痛手を与えた [Marine Le Pen 2006 : 118-124]。

ただ、離婚騒動はルペン一家にとってマイナスの結果だけではなかった。一連の離婚に絡む出来事を通じて、三人の娘たちは一貫して父親の側に立ってピエレットを非難した。母親の非常な仕打ちに直面して、父親と娘たちの絆はいつそう強固なものになっていった [Fourest et venner 2011 : 47-54, Simon 2011 : 204-208, Rosso 2011 : 179-180, Marie Le Pen 2006 : 108-110]。

政治に熱中して家庭を顧みないルペンは、マリーヌたちから普通の家庭生活を奪ってきた。離婚の根底には、そのようなルペンの政治優先の行動があったと思われるが、ルペンの不在はマリーヌにとっても苦痛であった。マリーヌは三姉妹のなかで父親と一番親密であっただけに、その不在にいつも苦しんでいた。しかし、マリーヌは父親が基本的に大好きであり、政治に夢中になり子供たちを顧みない父親を赦すための理由や口実を常に自分のなかに探していたと、ルペン家について詳しい知人は証言している [Liszskai 2011 :

52]。

青春時代の苦難や試練は、マリーヌを父親への反発や嫌悪に向かわせなかった。逆に、二人の姉を含めて、父親との絆を強固にする方向に働いた。そして、ルベンへの愛情は、マリーヌを政治の世界に、そして、父親の後継者へと導いていくことになる。

さて、ピエレットとルベンの離婚騒動には後日譚がある。一つは、後にピエレットとマリーヌたち姉妹が関係を修復したことである。最初にピエレットと連絡をとったのは長女のマリーヌ＝カロリーヌ (Marie-Caroline) であった。2006年、孫に引き合わせるためにマリーヌ＝カロリーヌが連絡をとり、次いで、マリーヌとヤンも母親と再会することになった。ピエレットは、離婚に絡んでマスコミにいろいろなことを吹聴したこと、特に『プレイボーイ』誌でヌード写真を披露したことを謝罪した。

離婚から15年後、ピエレットは経済的に破綻してルベン家に帰ってきた。党本部兼住居であるサン＝クルーの庭の奥にある小屋に住み、孫たちの面倒を見ながら暮らしていた。マリーヌは選挙活動で不在のときは、ピエレットに子供たちを託した。ルベンは怒りと恨みを抑えて、ピエレットがルベン家で老後の日々を送ることを黙認した。「ピエレットは単身で貧しく資力もない。彼女の人生に残されているのは祖母として孫と会うことだけだ」と、ルベンは前妻を赦したことについて語っている [[Liszkai 2011 : 27, Machurette 2012 : 18, Fourest et Venner 2011 : 54]。

後日譚の二つ目は、1991年5月31日、ルベンがニース生まれで4歳年下のジャーニー (Janny) と再婚したことである。マリーヌは、彼女のことを「美しく、優しく、政治家の妻に必要な勇気を備えた女性」と評している [Marine Le Pen 2006 : 125]。離婚騒動によって大きく揺れたルベン家は長い年月をかけて修復され、その過程でマリーヌは政治の道に乗り出し、ルベンと二人三脚の生活を送ることになった。

### マリーヌの学生生活

子供のころから父親の影響によって政治に関心をもつようになったが、学生時代のマリーヌは政治に熱心であった形跡はない。パリ大学アサス校で法

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (1)

律を学んでいたが、1987年、FN系の学生団体「学生刷新 (Renouveau étudiant)」から学生自治会の選挙に立候補したことが政治活動へのデビューであった [Rosso 2011 : 182]。学生時代は極右団体の学生たちと親交を結び、時には政治について論争を交わし、多くの書籍に接していたようであるが、政治関連の著名な古典や極右系の書籍は読んでいなかったようである [Simon 2011 : 240]。

同時代の学友たちの証言によると、大学時代のマリーヌはあらゆることに一家言もっていたが、特定の政治イデオロギーや政治文化に肩入れしていたという印象はなかった。当時、保守系と極右系の学生団体はFNの支持を求めてマリーヌを取り込もうと争っていた。だが、極右系団体の友人たちと酒を酌み交わすことはあっても、マリーヌは彼らの政治活動に与していたわけではなく、一緒になって極左系学生と乱闘に加わることもなかった [Liszskai 2006 : 66-67]。

要するに、極右政党の指導者を父親にもつにしては、学生時代のマリーヌは政治から距離をとっていた。むしろ、マリーヌの学生生活は、試験期間を除いてはパーティに明け暮れるような日々であった。彼女はダンスが上手く、大声でしゃべり、周囲の笑いを誘う、普通の学生であった。マリーヌは自分の大学生生活を「詰め込み式の猛勉強の時代」であり、自動車のガソリン代からたばこ代まで生活費は親がかりで学業に専念する日々だったと回顧している [Marine Le Pen 2006 : 141-142]。つまり、多くの学生と同じく、普段は大学生生活を大いに楽しみながら、学業に励むマリーヌの姿が浮かび上がってくる。楽しく陽気な日々を送り、少しだけ政治にも関わるといった大学生生活であった。

やがて卒業が近づき職業の選択に直面するが、マリーヌが選んだのは弁護士への道であった。1991年に刑法のDEA (専門研究課程修了証書) を「良」の成績で終えたマリーヌは、「弁護士職業研修センター (le Centre de Formation professionnelle des avocats = CFPA)」に入所した。1992年には、「弁護士職業能力証明書 (le Certificat d'aptitude à la profession d'avocat)」を授与され、念願の弁護士資格を取得した [Liszskai 2011 : 65]。ルペンは大学院博士課程への進学を勧めたが、マリーヌは生活費を稼いで父親から自

立することを望んでいた [Marine Le Pen 2006 : 143-144]。

普通の学生として大学生活を送ったマリーヌは、弁護士という職業を目指すことになった。ルベンから自由になり、政治から距離をとり、自立した人生を歩むというマリーヌの希望が実現するかに思われた。

## (2) 弁護士から政治の道へ

マリーヌは検事局第12支部で15日間にわたって研修を受けたが、その支部では未成年に関する事件を扱っていた。そこで悲惨な境遇の未成年の若者に接して、マリーヌは驚きと衝撃を受けている [Marine Le Pen 2006 : 145-147]。多感な青年期のマリーヌが恵まれない若者たちの事件に接したことは、後に「マリーヌのFN」が社会問題を重視することと無関係ではないだろう。

弁護士の職業を目指していたマリーヌは、左翼的立場の人々からも「感じがよく」「勇気がある」人物だと評価されていた。弁護士の世界では何よりも弁論の才が最も重視されるが、マリーヌがその才能にも恵まれていることは衆目の一致するところであった [Fourest et Venner 2011 : 90-91]。父親譲りといえる弁説の才能は、後にFN党首として縦横に発揮されることになる。

弁護士資格を取得したマリーヌは、弁護士の職業にとってルベン姓が障害になることを覚悟していた。1992年1月、弁護士職業能力証明書を取得するために研修を受ける必要があり、マリーヌは受け入れ先の弁護士事務所を探した。だが、予想通りに、父親の名前が災いして弁護士事務所探しは難航した。結局、ルベンの知り合いで極右系の弁護士であるG-P・ヴァグネル (Georges-Paul Wagner) の法律事務所に身を寄せることになった [Simon 2011 : 242]。1992年春には、その弁護士事務所でも薬害エイズ事件、アルジェリア人のサン・バピエ (滞在許可書不保持者) の弁護に携わることになった。

マリーヌは弁護士事務所を開業して顧客の選択から弁護の仕方まで自由に決めることを望んでいたが、顧客獲得の見込みや事務所とスタッフの経費、税金などの諸経費が大きな障害となった。何よりも困難であったのは、共同で開業する弁護士を見つけることであった。ルベンの娘と組むことは、職業的将来にとって自殺行為であったからである。結局、独立開業の夢は断念に

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (1)  
追い込まれ、職業生活においてもルペンの名前はマリーヌの希望を砕くことになった [Marine 2006 : 159-161]。

その後、マリーヌは時には FN 関係の訴訟を担当することもあったが、1997年末には、主要な弁護活動は FN 関係の案件になっていた [Marine Le Pen 2006 : 164-166]。それまで、FN から距離をとってきたマリーヌであったが、弁護士という職業活動を通じて党に接近していった [Crépon 2012 : 55]。

だが、FN 関係の弁護活動でも十分な収入がなく生活が苦しいので、マリーヌは FN に「法務サービス局 (un service juridique)」を設けることを提案した。1997年当時の FN は100名以上の常勤職員を抱えていたが、法務部門は擁していなかった。党は多くの訴訟を抱えており、法務部門の必要性が感じ始められていた時期であり、ある意味で時宜にかなった提案であった。マリーヌが党の執行員会に出席して設置を提案すると満場一致で承認され、実現に向かった(1998年1月1日に設立)。パリ弁護士会を退会すると、マリーヌは法務部門の局長としてサン＝クルーの党本部に入ることになった (2003年まで) [Marine Le Pen 2006 : 167] (17)。

結局、マリーヌは弁護士として父親と FN から自立することを望んでいたが、一般の弁護士のように独立開業することはできず、党専属の弁護士になった。それは党組織に組み込まれ、FN に本格的に関わることを意味していた (17)。

職業的自活によってルペンと FN から自立することを望んだマリーヌであったが、ルペンの娘であることはそのような道を閉ざしてしまった。事実上、マリーヌには党で働く道しか残されていなかった (18)。

ただ、当初からマリーヌは党組織に溶け込めたわけではなかった。法務担当者として党本部に通うようになってからも、マリーヌは党に馴染めなかった。現在は彼女の側近である B・ビルド (Bruno Bilde) は、マリーヌの横柄な印象、「感じが悪い」態度を覚えている。多くの FN 幹部たちも、人を馬鹿にしたような、しばしば挨拶も返さないマリーヌの不遜な態度を記憶している [Liszkaï 2011 : 73]。

独立開業の道を諦め、父親の FN に身を寄せたものの、党の活動に身が入

らないマリヌの姿が目には浮かぶようである。FNの不屈の闘士であり、有能な指導者であるマリヌが誕生するには、いましばらく時間が必要であった。

### 「家業」としてのFN

FNには、ルベンを中心とした親密圏が形成されていた。元FN幹部のC・ラング (Carl Lang) が「国民戦線は国民の戦線ではなく、一家の戦線だ」と揶揄しているように [国末 2017: 120], ルベンと3人の姉妹、その夫たちといった親族が党運営の中心を担ってきた。いわば「家長」としてルベンが絶大な権力を握り、ルベン家の「家業」として党は運営されてきた。ルベンの後継者がB・ゴルニッシュ (Bruno Gollunich) ではなく、マリヌであったことは、FNを「家業」と考えれば理解できることである。

FNが「家業」として運営されてきたことは、党資金の管理を見れば明らかである。1992年2月8日の『ルモンド』紙によれば、1980年代から1990年代にかけての党財政は、個人財産と議員や党員、外部からの献金を区別することが困難であり、いわば「どんぶり勘定」であった。例えば、1988年大統領選挙の経費を明らかにすることは不可能であると、国民議会の調査委員会に対して党の会計担当者は証言している。FNの会計担当者は党首ルベンによって任命され、党財政はルベン家の人々によって密室的に運営されていたからである [Turchi 2016: 33-34]。

1988年にルベンによって党の資金管理団体として「コトレック (Cotelec)」が設立された。「コトレック」は党財政とは別に、支持者からの献金の受け皿であり、党への資金の借入れと選挙での候補者への資金貸付も任務としていた。そのような団体を設けて党財政とは別に献金集めや資金の貸借を行うことで、党の財政はより複雑で不透明になった (19)。

そのような不透明な党運営によって、FNは「氏族 (clan)」であり、「家族的マシーン」であると非難され、FNの名称やスローガンにかけて「家族戦線 (Front familial)」, 「家族優先 (préférence familiale)」と非難されている [Turchi 2016: 37]。

FNがルベン家の私有物であるかのように運営されていることは、離党し

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(1)

た元幹部によっても告発されている。F・タンメルマンス(Frank Timmermans)は「縁者最良」と「依怙最良」が候補者選定でも支配していることを批判し、C・ラングも既述のように、FNが「氏族」であり「家族的マシン」であると証言している[Turchi 2016: 37-38]。

マリーヌたち三姉妹は、「家業」としてのFNの圏内から飛び出そうとは試みたが、結局はFNに戻ってしまう。長女のマリー=カロリーヌは『フィガロ・マガジヌ』や『コティディアン・ド・パリ』誌の記者として、ヤンは「地中海クラブ」などで働いた時期もあった。しかし、マリー=カロリーヌもヤンもFNで勤めることに落ち着いている[Fourest et Venner 2011: 101-102]。

マリー=カロリーヌは1999年の分裂時に配偶者とともにFNから離反してメグレ派に走ったが、その時も最終的にFNに復帰している。マリーヌも自立の試みが失敗して、党の専属弁護士として党活動に専念している。もちろん、本人たちの選択の結果ではあるが、「家業」としてのFNの重力に抗しきれなかった面も否定できない。

### マリーヌの政治体験

「家業」のなかで、いつしかマリーヌは党活動に慣れ親しんでいった。1981年にF・ミッテランが大統領に就任したころ、マリーヌは中学校の帰りに父のいる党本部に寄り、何時間もそこで過ごしていた。そのうちに党本部はマリーヌにとって第二の家庭のようになり、特に、母親が家出してからはそうであった[Liazkai 2011: 26]。長女マリー=カロリーヌのように15歳でFNの活動に身を投じることはなかったが、マリーヌも政治の世界に自然と足を踏み入れていった。

マリーヌを政治に導いたのは、もちろんルペンの存在であった。時には感情のもつれや諍いがあるにしても、マリーヌはルペンが大好きで、父親を通じて政治の世界に徐々に引き込まれていった。党本部が住居と一体であることが象徴しているように、FNの活動は家族の日常生活と大きく重なり、ある時期までのFNはルペンと考え方を共有する仲間の閉鎖的な親密圏として成立していた。マリーヌはルペンの娘である限り、自然とそのような親密圏の

一員になっていった。

高校生になると、マリーヌは政治の世界への最初の一步を踏み出した。そこにもルベンが介在していた。1983年の市町村議会選挙にパリ20区から立候補した父親のために、15歳のマリーヌは1週間学校を休んで選挙活動を手伝った。それは初めての経験であったが、情熱的で献身的な活動家によって支えられた選挙の現場に、若きマリーヌは魅了された[Marine Le Pen 2006 : 81-83, Liszakai 2006 : 55]。選挙が醸し出す高揚と熱狂の独特の雰囲気は、若きマリーヌにとって新鮮で感動的な経験であったことだろう。

選挙に関わっただけでなく、マリーヌは父親のためにメディアにも登場した。1984年2月13日、ルベンは1500万人の視聴者を誇る人気テレビ番組「真実の時間」に出演したが、そこには妻と3人の娘の姿もあった。ルベんと同様に、マリーヌたちにとっても公衆の面前へのデビューであり、そのことでルベンの娘であることが知れ渡り、マリーヌの匿名性は完全に崩れてしまった。

その番組への出演はルベんとFNへの関心を高め、翌日から党本部には入党希望者が殺到し、長蛇の列をつくることになった [Marine Le Pen 2006 : 94-96]。FNにとっても、ルベン一家のテレビ出演は大きな転機になった。

ただ、子供時代からマリーヌは党活動に親しみ、自然と政治に近づいていったが、かといって熱心な活動家というわけではなかった [Simon 2011 : 188-189, 238]。FNの主要な行事やデモには参加していたが、党の青年組織である「青年国民戦線 (FNJ)」(20)には加入せず、政治から距離をとっていた [Crépon 2012 : 51]。

そんなマリーヌも法務活動を通じて本格的に党活動に関わることになるが、他の姉妹もFNの活動を支えてきた。次女のヤンは1980年代から大規模示威運動の担当部局で働き、欧州議会議員B・ゴルニッシュ (21) のアシスタントとしても報酬を得ていた。長女のマリーヌ=カロリーヌはFN系のレコード制作・販売会社とビデオ制会社を切り盛りしていた [Turchi 2016 : 38]。

ちなみに、三姉妹の夫たちもFNで要職に就いている。マリーヌの2番目の夫であるÉ・イオリオ (Eric Iorio) は選挙担当の全国書記と地域圏議会議員を務め、3番目の夫L・アリオ (Louis Aliot) はルベンの事務室長、全



マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (1)

国書記長、副党首を歴任している。ヤンの夫 S・マレシャル (Samuel Maréchal) は「青年 FN (FNJ)」責任者、次いで党のコミュニケーション部門の責任者を務めた (後にマレシャルはヤンと離婚)。マリーヌ=カロリーヌの最初の夫 J-P・ジェンドロン (Jean-Pierre Gendron) は大規模示威行動担当部局で働き、政治局のメンバーでもあった。二番目の夫 Ph・オリヴィエ (Philippe Olivier) は全国代表副幹事を務めたあとは、地域圏議会議員とマリーヌの非公式のアドバイザー、副党首を務めている。ヤンとマレシャルの娘マリオン・マレシャル=ルペン (Marion Maréchal-Le Pen) は2012年に国民議会議員になっている。身内最良の誹りを恐れて、マリオンの政治局入りは見送られている [Turchi 1016 : 38-39]。

## 母親として、政治家として

マリーヌは1986年に18歳でFNに入党しているが、政治の舞台にデビューするのは1993年の国民議会選挙であった。パリ17区から立候補したマリーヌは、第1回投票で11%を獲得している。

だが、マリーヌが本格的に党活動と政治にコミットするのは1990年代後半になってからであった。1990年代後半は、マリーヌが徐々に党組織のヒエラルキーを上昇し、本格的な選挙活動を経験した時期であり、マリーヌにとっては人生の転機であった。また、私生活でも結婚と出産を経験し、家庭と政治活動の両立に追われた時期でもあった。

私生活においては、1997年にマリーヌは最初の夫 F・ショフロワと結婚した。ショフロワはFNの三色旗祭りのような大規模イベントを請け負うヴァル=ドワーズ県にある企業の支配人であった。マリーヌは1998年5月25日に第1子ジョアンヌ (Jehanne) を、翌年にはルイ (Louis) とマチルド (Mathilde) の双子児を生んでいる。マリーヌは子育てに追われて大忙しの日々を送っていたが、1999年にはショーフロワと離婚している。その2年後には全国書記長の E・イオリオと再婚しているが、後に離婚している。

既述のように、マリーヌ=カロリーヌとヤンも離婚を経験してしているが、ルペン姓を名乗る女性にとって結婚生活を維持することは難しいことであった。男性側にとっては、ルペンの娘を人生の伴侶にすることは大きな重圧で

あることは想像に難くない。二度の離婚を経験したマリーヌは、現在は副党首を務めるL・アリオとの事実婚を選択している。

マリーヌにとって離婚は不本意なことであったか、結果として、離婚と事実婚を選択したモダンな女性というイメージで見られることは、政治家マリーヌにとってはマイナスではなかった [Machuret 2012 : 21]。実際、働きながら一人で3人の子供を育てることは極めて困難なことであったが、その経験が自分を「フェミニストにした」とマリーヌは自伝で述べている。そこには、ルペンが娘たちに男性から自立して生きていくことを求め、娘たちに働き、自立することを勧めてきたことも影響していた [Marine Le Pen 2006 : 188-189]。

そのような忙しい生活のなかで、マリーヌは政治活動に本格的に乗り出したが、マリーヌは家族との静かな生活も大切にしていた。そこには、政治活動を優先して家庭生活を省みなかった父親への反発があったのだろう。家族を政治活動の犠牲にしないという姿勢は、あるルールを頑固に守っていることが象徴していた。それは、プライベートな写真を公表しないというルールであり、家族との親密な時間を守る決意の表れでもあった [Machuret 2012 : 28]。

さて、マリーヌの政治活動であるが、本格的に選挙に取り組むのは1998年の地域圏議会選挙からであった。1997年、マリーヌは当時の全国書記長C・ラングから翌年の地域圏議会選挙への立候補を打診された。前回の地域圏議会では立候補は断ったが、今回は承諾した [Marine Le Pen 2006 : 167-8]。ノール＝パ＝ド＝カレ地域圏から立候補したマリーヌは当選を果たし、初めて議員生活を経験することになった [Liszcai 2011 : 83, Marine Le Pen 2006 : 167-168]。

だが、出産と育児に追われていたからか、地域圏議員の仕事には身が入らなかった。議会にはほとんど出席しない目立たない存在で、当時の同僚議員にはマリーヌの議会活動についての鮮明な記憶は残っていないほどであった。ただ、地域圏議会議員になったことは、マリーヌの将来には重要な意味を持っていた。というのは、同選挙では、後にマリーヌとともに党の刷新に取り組む活動家たちが議会入りを果たしたからである [Simon 2011 : 276]。

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(1)

マリーヌが本格的に政治活動に乗り出したとき、FNは党内対立から分裂に至る激動の時代を迎えていた。マリーヌを巻き込んでFNの内部対立は激化していく。出産と育児に追われ、地域圏議会議員とFN幹部を務め、マリーヌは激動の日々を送ることになる。

## FN というマイクロコスモスのなかで-マリーヌの政治体験

前述したように、マリーヌはルペンが極右政治家であるがゆえに、多くの苦難の経験をしている。そのことは2つの影響をマリーヌに与えている。一つは、学校や職業生活で多くの反感や嫌悪の反応を経験するなかで、そのような感情の回避を重視する発想を身に着けたことである。「脱悪魔化」戦略によってFNのイメージを改善し、FNを「ノーマル化」という発想は、2002年の大統領選挙での国民の激しい反発も含めて、マリーヌの経験を抜きにしては考えられない。

「脱悪魔化」戦略を熱心に推進する現在のマリーヌの姿は、蛇蝎のように嫌われた父親の姿、学校で執拗にいじめられた自らの経験を踏まえた時、容易に理解できる。

二つ目は、ルペンが常に激しい批判と憎しみを浴び、時には暴力的事件に巻き込まれることを見てきたマリーヌたち姉妹は、ルペンを中心として団結を深めたことである。青春時代から学校でも父親を擁護してきたマリーヌは、政治家として父親としてルペンに愛情を持ち続けた。マリーヌを先頭に、三姉妹が「家業」としてのFNを支える構図は、父親との親密な関係のなかで築かれていった。

そして、過去のマリーヌを見た時、快活で陽気な性格、父親譲りの秀でた弁舌の才、「家業」としてのFNへの深いコミットメントと、マリーヌが将来のFNの指導者になる「必然性」が理解できる。

FNという父親の遺産を受け継ぎながら、それを発展的に変えていく新党首マリーヌと「新しい」FNを理解するために、次章以降ではFNの過去と現在についての分析と考察に取り組みたい。

## 注

- (1) パリ郊外のサン＝クルーの丘に建つルベン家の住居兼党本部は、FNにとって貴重な拠点であった。その立派な建物は、ルベンとFNの熱心な支持であり、党の中央委員を務めていた資産家から遺産相続したものであった。1976年9月27日に、病弱な資産家ユベール・ランベール (Hubert Lambert) が死去すると、ルベンは遺産相続によって約400万ユーロ以上の資金とサン・クルーの豪邸を取得した。その遺産によってFNは活動資金を手に入れ、ルベンはFNの活動に専念する「自由」を手に入れた [Igounet 2014 : 83-85]。
- (2) 本稿では、2011年にマリヌ・ルベンが新党首に就任する時期以降のFNを分析と考察の対象にしている。だが、現在のFNは前党首J＝M・ルベンのFNとイデオロギーや政策、言説組織など多くの面で連続性をもっている。マリヌが取り組んでいる党の刷新は前党首時代から始まり、マリヌは1980年代後半から模索されてきた戦略を踏襲している。ゆえに、マリヌのFNを理解するためには、J－M・ルベンのFNについても言及せざるをえない。ただ、過去にその時期のFNについては2冊の著書で扱っているので、繰り返しを避けるために「マリヌのFN」を理解するための作業として必要な限りで「ルベンのFN」についても触れることにしたい。結党 (1972年) から2000年代始めまでのFNについての詳細は、畑山 (1997) (2007) を参照されたい。
- (3) 人々はしばしば「マリヌ」と親しげに呼ぶ。もちろん、父親と娘を区別するために父親を名字で娘を名前で呼んでいることもあるが、マリヌの性格が親しく名前と呼ばれることにつながっていることは確かである [Fourest et Venner 2011 : 9-11]。本稿でも父親をルベン、娘をマリヌと呼び分けることにする。
- (4) 1968年の「5月革命」については、[畑山 1995] を参照。
- (5) 1987年にL・ジョスパン (Lionel Jospin) を首班とする「多元的左翼」政権が成立するが、社会党は577議席中たった8議席を擁するに過ぎない緑の党を連立政権に加えた。政権政党化することで現実主義に傾斜し、変革を主導する政党というイメージを失ったからである。緑の党との連立は、ユニークで魅力的な政策のアイデアの在庫が枯渇していることへの対応であったと言われている [畑山 2012 : 142]。
- (6) 左右両翼の対立構造の揺らぎは、有権者の意識にも反映されている。「左と右という考え方は時代遅れである」と考える有権者は1981年では33%であったが、1991年55%、2000年代初頭60%、2012年68%と一貫して増加している [Perrineau 2014 : 165]。
- (7) 失業に見舞われ、地域社会や教育から排除され移民青年の問題が深刻化し、パリ、リヨン、マルセイユなどの大都市郊外では1990年代に入って、放火や暴力行為、殺人などの事件が多発し、警察とマグレブ系青年たちとの衝突が起きている [畑山 1997 : 22-23]。
- (8) 2000年代になると棄権は急速に増大していった。2002年の大統領選挙28.4%、2008年市町村議会選挙33.5%、2009年欧州議会選挙59.4%、2010年地域圏議会選挙

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (1)

53.7%, 2011年県議会選挙55.7%, 2012年国民議会選挙41.3%と、過去の記録は塗り替えられていった。そして、FNは棄権層で支持率が高かった。2011年に棄権層に対して実施された調査で、投票に行くとしたらどの政党に投票するか棄権層に尋ねたところ、マリーヌ・ルペンが27%と圧倒的に多かった (2位はトロツキスト候補のO・ブサンスノで13%) [Perrineau 2014: 162-163]。

(9) 2017年の大統領選挙では、第1回投票でJ・L・メランション (Jean-Luc Melançon) が20%近い得票を獲得して第4位につけた。J・L・メランションは社会党のなかで欧州懐疑主義の立場をとり、2005年の欧州憲法条約案をめぐる国民投票では反対陣営に加わっている。その後、離党したメランションはフランス共産党と連携して「不服従のフランス」という急進的な左翼連合を結成して、2017年の選挙に臨んでいる。フランスでも左翼ポピュリズム政党が政党システムの一角に定着する可能性はある。

(10) フランスは伝統的に政党や政治家と国民の距離が遠く、制度的政治の場に民意が代表されていないという感覚が強かった。フランスで大規模なデモが見られるのは、政治的代表制への不信や不満から理解できる [中山 1999]。政党や政治家に対する不信という伝統は、近年でも健在であり、強化されている。世論調査によると、回答者の87%は、フランス人の考えていることに政治家はまったくか、ほとんど興味をもっていないと考え、69%は民主主義が機能していないと回答している (2009年では48%)。11%しか政党を信頼せず (例えばアソシエーションには65%が信頼)、67%が政治に嫌悪や軽蔑を感じている (尊重しているのは1%, 希望をもっているのは5%)。フランス人がかつてこのように「政治階級」を嫌悪したことはなかった [Ouraoui 2014: 29-30]。

(11) この30年来、フランスは地域間の不均衡と格差の拡大による「新しい分断」を抱え込み、大都市部に属する「製造業と商業が盛んで、ダイナミックなフランス」、シェルブルとニースを結んだ線の西側の「製造業と商業が不振であるが観光や公的雇用、退職者でダイナミズムを保っているフランス」の両地域とは対照的な、産業の衰退によって製造業と商業が困難に陥っている北部フランスと北東部フランスのコントラストが鮮明になっている。

2017年の大統領選挙でも、フランス北東部の「鉄の街」アイアンジュや北フランスの旧産炭地にあるエナン・ボーモン (Hénin-Beaumont) がFNの拠点都市になっていることが報道されたが ([朝日新聞] 2017年1月3日、4月20日)、グローバル化による地域の衰退や格差の拡大は、左翼と保守の対立を超えた重要な政治的亀裂になっている [Perrineau 2014: 151-152]。「一つにして不可分なフランス」は分断され、2017年の大統領選挙でも、ダイナミズムを失ったフランスでマリーヌはマクロンを超える票を獲得している (「分断されたフランス」とFNの得票については後に詳述)

(12) 2012年の大統領選挙でも、エコロジスト候補E・ジョリ (Eva Joly) とマリーヌの投票者は対照的な傾向を示していた。ジョリの投票者では「死刑に反対」(84%, マリーヌ投票者では死刑復活に賛成が60%)、「移民の存在に肯定的」で (78%, マリーヌの投票者では移民が多すぎると88%が回答)、「ホモセクシュエルに受容的」(91%, フランス人全体では78%)、「学校教育での批判的で覚醒の精神の育成」(86%, マリーヌ投票

者では23%)といった見解でFN支持者と対極の傾向を示し、文化的リベラリズムの思考の特徴を鮮明に示している [Perrineau 2014 : 143-144]。

- (13) フランス緑の党についての詳細は、[畑山 2012] を参照。
- (14) 「コミユナリズム」はFNによってイスラム系移民への非難の言葉として使われているが、元大統領N・サルコジも2007年の大統領選挙で、「(フランスは) 各人を民族的な、あるいは宗教的なルーツに回帰させるコミユナリズムをどの国よりも拒否する」と述べている [井出 2009 : 86]。

- (15) といっても、既成政党側も移民問題に対して無策であったわけではない。居住環境の改善のために、全国の都市部での公営住宅の整備、初等から高等教育までの無償での提供、移民子弟の多い都市郊外や過疎地に「教育優先地区」を設定することで資金と人材を集中的に投入するといった政策が実施されている。また、ミッテラン大統領のもとでは、外国人のアソシエーションやラジオ放送といった文化活動の奨励、移民統合に向けた「高等総合評議会」の設置、「社会行動基金」の活用なども推進されてきた [竹沢 2011 : 97-98]。

- (16) 1928年6月20日にブルターニュ地方のモルビアン県にあるラ・トリニテ＝シュル＝メールで漁師の息子として生まれたルベンは、戦時中に漁場での機雷事故で父親を亡くし「国の被後見被災孤児」になっている。本人は対独レジスタンスに参加したと主張しているが、真偽は定かではない。戦後は対独協力者への過酷な仕打ちに反発して、反共産主義の立場をとるようになった。

パリの大学で法律を学んでいたルベンは、仲間たちと酒を飲み、大いに議論を闘わす学生生活であったが、極右の活動家として大学や街頭で左翼学生と乱闘を繰り返す日々でもあった。1949年には右翼系の学生自治会の委員長に就任している。

卒業後はインドシナやアルジェリアでの植民地戦争に従軍し、アルジェリアでは拷問の嫌疑を受けている。インドシナで従軍時に、商人や手工業者を組織するP・ブジャード (Pierre Poujade) と出会ったルベンは、帰国後にブジャードが率いる伝統的中間層の反税運動であるブジャード運動に参加し、1956年の国民議会選挙で同運動から最年少の議員 (27歳) として選出されている。後にブジャードと訣別したルベンは、国民議会議員を休職して出征し、スエズからアルジェリアと転戦している。

その後は、アルジェリア独立反対運動、1965年大統領選挙での極右統一候補 J=L・ティクシエ＝ヴィニヤンクール (Jean Louis Tixier-Vignancourt) の選挙運動に加わり、弁舌の才に恵まれたルベンは極右陣営の有名な政治家になった。そのキャリアは、1972年に結成された国民戦線の党首にルベンが抜擢されることにつながった [畑山 1998, 2007, Lecœur 2007 : 191-194]。

- (17) 法務部門の局長として、マリーヌは月額3万フランの給料を得ることになった [Rosso 2011 : 182-183, Marine Le Pen 2006 : 151, Fourest et Venner 2011 : 97-101, Simon 2011 : 244]。

- (18) マリーヌだけでなく、三姉妹は職業的に自活することを望んだ。だが、父親の存在は学校生活だけでなく、職業生活や結婚生活にも影響を与えた。例えば、ヤンは「地

マリヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (1)

中海クラブ」やパリでグランドホステスを派遣する代理店を開設したが、ルペンの娘であることが大きな障害となった。ある企業では従業員たちがヤンとの取引に反対してストライキに入り、結局、ヤンは代理店の閉鎖に追い込まれた。ヤンがその事業で抱えた負債はルペンに清算してもらったことになった。その後、ヤンはFNの党员ではない男性と結婚するが、結婚生活は1年でピリオドを打つことになった [Liszaki 2011 : 63]。長女のマリー・カロリースも『フィガロ・マガジヌ』誌、『コティディアン・ド・パリ』誌での短い勤務を経て、1985年にはFNで出版部門を担当することになった [Liszaki 2011 : 63]。

結局、三姉妹は、職業生活から結婚生活まで党のマイクロコスモスのなかで送らざるをえなかった。

(19) 後に、マリヌも父親を見習って、独自の資金管理団体「ジャンヌ (Jeanne)」を設立している [Turchi 2016 : 34-35]。

(20) 「青年国民戦線 (Front national jeunesse=FNJ)」は、FN結成の翌年 (1973年) に創設されている。16-25歳の活動家を組織し、青年の間に党の理念を広めることを任務としていた。1967年生まれのS・マレシャル (次女ヤンの夫) は1992年にFNJのトップに就任しているが、党内の強硬派との確執によって1999年に辞職している [Lecœur 2007 : 146, 198-199]。

(21) B・ゴルニッシュは1950年生まれで、東洋語 (日本語、マレーシア語、インドネシア語) を学んで、1970年代末には大学で日本の法律と文明を教え始め、リヨン第三大学の学部長にまでなっている。同時に、ゴルニッシュは極右勢力とも親しく交わり、1980年代初めにはFNに入党している。彼は、カトリック伝統主義派を始めとした党の極右的体質をもつ勢力に属していた。1999年のFN分裂後は党のナンバー2としてルペンの後継者を自負していたが、マリヌが頭角を現すと熾烈な党首争いを演じた。党首選挙で敗北した後も党内にとどまっているが、その影響力は大きく低下している [Lecœur 2007 : 164-166]。

## 参考文献

### <日本語文献>

井出季彦 (2009) 『移民のフランスー「シテ」からみた大統領選挙ー』西日本新聞社。

植村 邦 (2002) 『フランス社会党と第三の道』新泉社。

小熊英二 (2012) 『社会を変えるためには』講談社。

長部重康 (1995) 『変貌するフランスーミッテランからシラクへ』中央公論社。

シリネッリ, ジャン=フランソワ (川嶋修一訳) (2014) 『第5共和制』白水社。

竹沢尚一郎 (2011) 「フランスにおける移民問題の複合性ーサンパピエと移民第二世代の視点から」, 竹沢尚一郎編著 『移民のヨーロッパー国際比較の視点から』明石書店。

中山洋平 (1999) 「フランス」, 小川有美 (コーディネーター) 『国際情報ベーシックシリーズ EU 諸国』自由国民社。

- 畑山敏夫 (1995) 「フランス 1968年5月－政治的ユートピアの終焉」岡本宏編『1968年－時代転換の起点』法律文化社。
- (1997) 『フランス極右の新展開－ナショナル・ポピュリズムと新右翼』国際書院。
- (2007) 『現代フランスの新しい右翼－ルペンの見果てぬ夢』法律文化社。
- (2012) 『フランス緑の党とニュー・ポリティクス－近代社会を超えて緑の社会へ』吉田書店。
- 藤巻秀樹 (1996) 『シラクのフランス－新ゴースト政権のジレンマ』日本経済新聞社。
- モーリス・ラーキン (向井善典監訳) (2004) 『フランス現代史－人民戦線期以後の政府と民衆』大阪経済法科大学出版部。
- 渡邊啓貴 (2015) 『現代フランス－栄光の時代の終焉、欧州への活路』岩波書店。
- 吉田 徹 (2011) 『ポピュリズムを考える－民主主義への再入門』NHK 出版。

#### <外国語文献>

- Albertini, Pierre (1997), *La crise du politique. Les chemins d'un renouveau*, L'Harmattan.
- Collovald, Annie (2004), *Le 《Populisme de FN》－ un dangereux contresens*, Éditions du Croquant.
- Crépon, Sylvain (2012), *Enquête au cœur du nouveau Front national*, L'Harmattan.
- Fourest, Caroline et Venner, Fiammetta (2011), *Marine Le Pen démasquée*, Éditions Grasset & Fasquelle.
- Igounet, Valérie (2014), *Le Front national de 1972 à nos jours. Les Partie, les hommes, les idées*, Éditions du Seuil.
- Lacœr, Erwan (sous la direction de), *Dictionnaire de l'extrême droite*, Larousse.
- Le Pen, Marine (2006), *À contre flots*, Grancher.
- Liszkaï, Laszlo (2011), *Marine Le Pen. Un nouveau Front national*, Éditions Favre SA.
- Mayer, Nonna (2012), "De Jean-Marie Le Pen à Marin Le Pen: l'électorat du Front national a-t-il changé?" dans Delwit, Pascal, *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*, Éditions de l'Université de Bruxelles.
- Machuret, Patrice (2012), *Dans la peau de Marine Le Pen*, Seuil.
- Muxel, Anne (2012), "La tentation des partis extrémistes chez jeunes" dans Orfali, Birgitta (sous la direction de), *La banalisation de l'extrémisme à la veille de la présidentielle. Radicalisation ou dé-radicalisation*, L'Harmattan.
- Ouraoui, Mehdi (2014), *Marine Le Pen, Notre faute. Essai sur le délitement républicain*, Michalon Éditeur.
- Perrineau, Pascal (2014) *La France au Front*, Fayard.
- Rosso, Romain (2011), *La face cachée de Marine Le Pen*, Flammarion.
- Simon, Jean-Marc (2011), *Marine Le Pen, au nom du père*, Éditions Jacob-Duvernet.
- Sineau, Mariette (2012), "D'un Le Pen à l'autre: l'image du Front national à la veille de la



マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(1)

Présidentielle de 2012” dans Orfali, Birgitta (sous la direction de), *La banalisation de l'extrémisme à la veille de la présidentielle. Radicalisation ou dé-radicalisation*, L'Harmattan.

Turchi, Marine (2016), "L' Argent du Front national et des Le Pen. Une famille aux affaires". *Pouvoirs*, no.157.